

中西英一（著）

地べたから考える精神科作業療法

宮崎 宏興

（特定非営利活動法人いねいぶる，理事長・代表）



地べた＝市井に暮らす人々。著者曰く、精神科作業療法を“根っこから”でも“風景から”でもなく、「地べたから考える」のだそう。作業療法を学びはじめたひとやその実践に悩むひと、そして市民一人ひとり、ともに歩むひと。まさしく、いつも何かしらに悩んで自信をもてない今の「私」自身でもある。

この本は、精神科作業療法の手触りと体温を感じるような言葉を、日常の業務へ滑らかに編み込みながら、私たち読者一人ひとりへ語りかけてくる。その語り口は優しいが、決して、雰囲気語りなどではない。読み進めるなかで紹介される文献や引用される一節の数々は、“これ、単に著者の読書癖なんじゃないの？”的なものや、“テレビ番組から引用するとかアリ？”と突っ込みたくなるものまであるのだが、それが「地べた」に立つ私の自己肯定感をグイグイ

引き上げてくれる。著者の人柄が透けて見える“いかにも”の展開である。

実は、今から四半世紀もの前、不出来な実習生の私に、精神科作業療法の魅力と奥深さを伝え、根気よく、さまざまな言葉と表現を用いて、この生業がいかにユニークかを教えてくれた指導者が、誰であろう著者の中西氏なのである。本から投げかけられる問いの言葉は、その当時から変わらない。なぜだか、初めて自転車に乗りはじめたときの感覚とシンクロするのだ。荷台をしっかりと握って後ろから押してくれている感覚。それがあってこそ安心して自分の力でペダルを踏み込みながら後輪を廻して前進しようとする感覚。そしてどうすれば思った進路へ前輪が向くのかを学びたいと思う感覚。著者からの問いには、そういった、地に足がついているという安心感と、自分の力で踏み込

む動力、ある一定の安定した進路を得るための知識欲が、わくわくするような冒険心とともに刺激されるのだ。定義や意味の深堀りから、権利や尊厳等のうつわの理解、実践過程に至るまで、幅広くも柔らかく1冊に収めた著者の意気込みに感嘆しかない。

著者は、この本の終わりで浅学非才を謝罪している。おもしろい。それでも、きっとこれからも執筆を続けるのだろう。そして、間違っていると思えば、拍子抜けするほど簡単につくり直していくのだろう。それこそが著者のしなやかさであり、「私」と同じく、市井に暮らす人々の一人であることの表現であり、悩んだり迷ったりする自分と寄り添って生きるためのスタイルでもあるのだから。

〔 B5判 120頁 3,200円＋税 〕
 シービーアール刊
 ☎ 03-5840-7561